



OSBPの敷地内に地元の人々が自由に入り、商売ができてしまうのも現在の課題



ブルキナファソ側にあるサンカンセOSBP。ここで両国の職員が通関手続きに携わる

従事する人が人口の8割を占める世界最貧国の一つだ。隣国のトーゴも人口が630万と少なく大きな産業もない。だが、この地域の発展のカギを握る国際港のロメ港がある。水深が16メートルもある良港で大型船も入れるため、貿易の窓口としてポテンシャルは高い。

現在、トーゴからブルキナファソへはガソリンや野菜、食品などが多く運ばれ、人々の生活を支えている。しかし、国境を越える手続きには数日から数週間を要し、無駄な時間や輸送コストがかかっている。

これを改善するための取り組みがワン・ストップ・ボーダー・ポスト

スト(One Stop Border Post: OSBP)だ。これまで出入国審査、税関、検疫などの手続きは、出国側と入国側の別々の場所で行うのが一般的だった。そこで2カ国の国境に散らばっている関連官庁を一元所(One Stop)に集め、協力して働く仕組みを整えて手続きの効率化を目指すことにしたのだ。

山積み課題を乗り越えていく

しかし、OSBPは西アフリカでは初の取り組み。そう簡単に事は運ばない。2010年にブルキナファソ側の町サンカンセにOSBPが建てられたが、まだまだう

まく機能していないのが現状だ。「手続きをするトラックなどが敷地内でどのように移動するかの動線ができておらず、施設内の地盤や道路、塀の工事も並行して進んでいるため、渋滞が起きてしまっています。そこで現在、効率的な運営を目指したマニュアルをつくっているところです」と徳織専門家は話す。また、ブルキナファソとトーゴで使われている通関のITシステムを接続し、申告書をデータで共有することで、国境での申告手続きをなくす取り組みが進んでいる。そこで日本の税関分野の専門家としてUEMOAへ派遣中の宮川裕之専門家と藤光基裕専門家が、現地アドバイスなどを行って支えている。

OSBPの円滑な運営には、国境関係者の理解が欠かせない。そこで徳織専門家らが2013年に立ち上げたのが、両国の税関職員や地方自治体の行政官、輸出入業者、通関手続きを行う業者、トラック運転手組合の代表などがメンバーになった諮問委員会。情報を共有する「場」をつくり、課題を話し合うためだ。「多様な組織が関わっているため、最初のころはOSBPの意義を理解してもらい、建設的な議論に持っていくのが大変でした」と徳織さんは話す。しかし、少しずつ関係者との連携が生まれている。サンカンセ



諮問委員会のメンバーとサンカンセを視察する徳織専門家(右から3人目)と藤光専門家(右端)

で手続きが始まった直後、考えられないほどの長い渋滞が起こり、ドライバーはトイレやシャワー、食べ物もない中で何日も待つはめに。「彼らの不満が高まる中、諮問委員会で緊急対応策を考え、メンバー自ら炎天下で1日中トラックを誘導して渋滞を緩和させたのです。メンバーが連携して共に課題に取り組み。その手応えを少しずつ感じていきます」と徳織専門家は語る。

地域を一つにまとめていくのは、一人一人の努力の積み重ね。新しい挑戦はスタートを切ったばかりだ。

スムーズな物流が成長につながる

ブルキナファソ、トーゴ、コートジボワール、ニジェール、ベナン、セネガル、マリ、ギニアビサウ。これらの西アフリカ8カ国は、西アフリカ経済通貨同盟(UEMOA)の一員だ。人口が少ない国もあるが、地域が一つにまとまることで、1億人規模の大きな市場

が生まれる。域内共通の通貨や関税制度を設け、地域内の物流の円滑化や経済の統合を目指している。国際港や各国の主要都市を結ぶルートを、線をつなぐと円になる。日本はこの地域を「西アフリカ成長リング」と命名し、今年から、総合的な地域開発の戦略策定に向けて調査を始める予定だ。その一つが、トーゴのロメ港とブルキナファソの首都ワガドゥグを結ぶ

ルートだ。UEMOAで広域にまたがるインフラ整備支援を担当する徳織智美JICA専門家は、学生時代に初めてブルキナファソを訪れた時をこう振り返る。「夜のフライトで到着したらあまりにも真っ暗で、砂漠に不時着したのかと真面目に思いました」。それから15年がたち、街の明るさに変化を感じる。しかし今でも、農業や牧畜に



CASE 2

[上]トーゴ側から来たトラックがサンカンセOSBPの入口で長い列をつくることもある
[下]この地域の貿易の窓口となるトーゴのロメ港。輸入の方が多いため、将来的には同港からの輸出増加も目指す

from ブルキナファソ&トーゴ

Burkina Faso & Togo



西アフリカを一つに

小さな国々がひしめく西アフリカ。各国をつなぎ、ヒト・モノ・カネの移動がスムーズになれば地域全体が共に発展できるはず。その大きな目標に向かい、日本人専門家たちが奮闘中だ。